

「何も有れへんがナ。」

「そんな事が有るかい。彼様立派に云ふてよるね。充分見いな。膳棚か水屋に入れて無いか。」

「大體膳棚も水屋も有れへんがナ。」

「妙やなア。………なア作たん。何も有れへん云ふてよるで。」

「家に無いか。待ちや………ハハアすると横町の煮賣屋やつたかいナ。」

「オイ〜。嘘や〜。煮賣屋の店に有る物を皆並べやがつたんや。コラ惣物にすない。人に散々禮

云はーやがつて。」

「左様やさかい云ふてるがナ。禮云われると辛い………」

「當然ちや極道奴。………お前等も又完全見てから禮云わんかい。」

「そら何云ふね。お前が禮云へ〜云ふもんやさかい禮云ふたんや。俺い等お辭儀四ツした。」

「まア皆腹立てゝなや。俺いかて有たら出すのやけど無い時は御互や。今日は其方のん饗ばれるわ。」

「もう斯んな奴相手にしいナ。御馳走を皆此方へ持といで。それから羅宇仕替屋の片荷と齒入屋の箱とを持て来るのや。家主の裏に醬油樽の空いたんが放り出したアるやろ。彼奴を綺麗に洗ふて齒入屋の箱の中へ入れるね。長屋中の茶を皆あの樽へ詰めるのや。」

「甚い泡やで。」

「新酒や思ふてたら宜えがナ。」

「色が濃過ぎる。」

「水入れて薄めえナ。今日は癖も老人も皆連れて往たる。ア、源やん濟まんけどナ。奥の塵芥場に梅干の筵が放たアる依て持て來てんか。向ふへ往たら毛氈の代りに敷かん成らんさかい序に持つて往こ。」

「ヤア誰方も大きに………」

「夫れ見い。お前等愚圖々々してる間に、徳やんがチャンと支度して來たがナ。併し甲斐性者やなアこんな長家に住でゝも、いざ出ると云や羽織の一枚も引掛けてるがナ。徳やん小紋やな。鳥渡荒いがエライ好え羽織やないか。」

「羽織に見えるやろ。」

「見えるやろて、羽織と違ふかいナ。」

「いんや。儒袴の襟を外して着てるね。」

「豪い事考えよつたナ。」

「ヤア失禮しました。」

「オ、八卦見の先生。流石お商賣柄や。黒の五つ紋で上品な風態やなア。先生奉書だすか。」

「イヤそんな上等や無いので。」